

平成18年3月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館

(青梅市駒木町1-684 Tel0428-23-6859)

野上町の大国講

「講」とは『広辞林』によると、「中世中頃以後、民衆の間で作られた仏事や神事を行うための結社。寺院、寺社などを維持したり、集団参拝を行った。近世になると、行楽を主目的として名山、霊場などへ集団参拝するためのものも生まれた。富士講、伊勢講など。」と記されています。市内でも各地域に今も講が残っているところが多いようですが、中でも立春過ぎの初午（現在は2月の第1日曜日あたり）の日に行われる「稲荷講」は各所で行われているのではないのでしょうか。

私が住んでいる野上町には、「大国講」という講が今も伝わっていますので、今回はこの「大国講」について紹介します。

「大国様」と「大黒様」。この二つはどのように違うのでしょうか？

「大国」とは日本神話に出てくる「オオクニヌシノミコト」のことで、「因幡の白ウサギ」の神話でも分かるように大きな袋を背負っている神様です。これに対して「大黒」とはエビスダイコクの「大黒天」のことで、すなわち「七福神」の中の大黒天のことで、元々インドの神様です。この「大黒様」も大きな袋と打ち出の小槌を持っています。そのため、いつしかこの二つは習合（シュウゴウ…合体してしまうこと）してしまい、平成6年に野上町1丁目にある春日神社の一角に新しく社殿を建てましたが、その中には「大国主のミコト」の掛け軸と「大黒天」の彫り物がいっしょにまつられています。このことに関しては、講員の皆さんも余り気にとめていないようです。

さて、この「大国講」ですが、講員は現在64名（野上町1丁目と野上町2丁目）で構成されています。この中に総代（講の全体を仕切る長老格の者）7名と年番といってその年の当番者5名が交代で講の運営を行っています。毎年2月11日の建国記念の日の午後4時から始められる祭典の相談を1月の中ごろにします。

今とは経済事情が違っていたので、昔のことは不明な部分がありますが、現在、講員は祭典当日に講元（総代）から「福德資金」として1000円を借り、次の年の祭典日に1500円を返済します。つまり、年歩50%の利息を講元に返す仕組みになっていますが、利率は昔も今も変わっていないようです。この利息が、会を運営する原資となるのです。

祭典当日は、朝、自治会館に総代と年番が集合して準備を始めます。まず奉納を受けたのぼりを組み立てて社殿の周りに立て、社殿の掃除やしめ縄の張り替えを行います。玉串を作

ったり、祭典の準備が整うと年番は買い出しに行きます。この買い出しというのは、祭典終了後の直会（なおらい）の食べ物やその席で行う競売品です。競売品はいろいろで、ネギや人参・大根・キャベツなどの野菜からリンゴやミカンなどの果物、カップラーメン等の食べ物から始まって、たわしや洗剤等の日用品までかなりの分量です。

これらの競売にかける品物の買い出しが終わって、直会の会場準備が終わるといよいよ祭典です。春日神社の宮司が祭主として社前で祝詞を奏上した後、玉串を奉奠（ほうてん）して祭典は終了します。その後、場所を野上自治会館に移して総会を行います。会計報告の承認、次回年番の選出が行われた後いよいよ祝宴の開始です。祝宴の際、競売が行われます。競売は準備した品がなくなるまで行われます。品物がなくなる頃には、もう全員ができあがっており、あちこちで歓談の輪ができているという具合です。最後に何回か手じめが行われた後、散会となります。

次の日は役員や年番が出て半日かけて後片付けが行われ、祭典は終了します。

その後、2月中に、競売品の売り上げや諸費用の精算が行われ、役員と年番で反省会と事務引継ぎを行ってすべての行事が終わります。後は次年度まで、集まることは年末の社殿の掃除ぐらいで、特にありません。去年は、今までの競売等で出た余剰金が貯まったからということで、バスを借り切って茨城県にある出雲大社の分社に親睦の旅行をしてきたそうです。

このような野上町に伝わっている「大国講」ですが、はっきりわかっていることは、明治初年から記録が残っているということと、かつてはこれが自治会の総会を兼ねて行われていたということの2つです。近年、議員の高齢化と、いつでもどこでも酒が飲めるようになったせいか、議員の減少という問題が出てきていますが、未永く残していきたい地域の行事です。

今回は、野上町に伝わっている「大国講」のことを紹介しましたが、御嶽講、大山講、伊勢講、浅間講、三峯講、古峯講など、まだ現在も講が行われているところがあれば、ぜひ記録に残しておきたいと思いますのでお教えください。

（文責 神森 正）